Kam Louie,

Theorising Chinese Masculinity: Society and Gender in China.

Cambridge: Cambridge University Press, 2002, viii+239pp.

姚（ヨウ）　毅（キ）

I

近年，女性史研究だけでは抑圧システムの歴史的真相を十分に解明することはできないという認識のもとで，男性権力に内側から焦点を当てて研究する必要性と重要性が提起され，いわゆる男性史研究が盛んになってきた。米・英における同性愛運動とメンズリブ運動という２つの社会運動が，男性間の不平等，男らしさの神話の虚構性を暴き出し，男対女，つまり男性による女性の抑圧という支配構造の単純さを批判し，男性史研究が要請される直接的な背景となった。男性の歴史を研究することによって明らかになったことは，女性ばかりでなく，実は男性も「家父長」制度によって抑圧されているという点であった。また，文化的構造として性を理解するためには，常に男性と女性，男らしさと女らしさを一対で見ていかなければならないということも明らかにされた。

本稿で評するKam Louieの著作は，このような欧米の研究動向と研究方法に刺激され，中国研究における男性史研究の不在を痛感し，それを中国に適用しようと，初めて中国男性史に挑んだ意欲的な書である。西洋における男らしさ研究のパラダイムをそのまま用いるのではなく，中国の歴史的文脈に沿って研究しなければならないとして，中国において歴史的に深い意味を持つ「文―武」という対概念を掘り起こし，中国の男らしさの特質を分析するパラダイムを提示した点が最も特徴的である。「内発史観」という，近年の中国研究のパラダイム転換はここでも健在である。

本書の分析対象は，時間的には二千年前の孔子，三国志の関羽から現在まで，空間的には中国本土から欧米にまでまたがっており，研究素材も小説，ドラマ，劇，映画など多岐にわたっている。異なる時代と異なるジャンルの膨大な量の作品の渉猟，そしてそれらをひとつのテーマに纏めたテクニックに感心したのは評者一人ではあるまい。

著者はオーストラリアのクイーンズランド大学の中国学教授で，中国文化に関して数多くの作品を著している。また，本書に多くの助言を与えたパートナーのLouise Edwardsは女性学の専門家であり，第１章の共同著者でもあることから，本書は女性史側からの要請というメッセージとしても読み取れるだろう。

II

以下，まずは本書の構成と内容を簡単に紹介しよう。なお訳語として，文中の“wen”，“wu”，“wen-wu”は，それぞれ「文」，「武」，「文―武」と表記した。

第１章　「文―武」を導入する――中国の男らしさの定義に向けて――

第２章　戦いの神関羽像――性，政治と「武」的男らしさ――

第３章　聖人，教師，ビジネスマンとしての孔子――「文」像の変換――

第４章　学者と文人――過去と現在における「文」的男らしさの表現――

第５章　労働者階級のヒーロー――伝統的小説とポスト毛時代の小説における「武」のイメージ――

第６章　女性の声――20世紀における女性から見た理想の男性――

第７章　老舎の『二馬』と外国人妻たち――近代世界にふさわしい「文」的男らしさの構

築――

第８章　ブルース・リー，ジャッキー・チェン，チョウ・ユンファ――「武」的男らしさの国際化――

第９章　再構築された「文―武」――雑種化，世界化された中国の男らしさ――

まず，第１章では，中国の男らしさに関する研究を理論化する必要性を提起し，研究の枠組みを提示している。1980年代を過ぎると，中国でもジェンダーに対して関心が集まったが，そこには重大な欠陥があった。男らしさの分析が欠如していたため，結果的にジェンダーは「女性」の類義語になってしまったのである。したがって本書においては，ジェンダー研究領域に男らしさも含めることの重要性，および中国の男らしさをひとつの独立なカテゴリーとして概念化することの必要性を明らかにすることが第一義となる。特に中国の男らしさは，中国側からも西洋側からも神秘化されており，白人や黒人よりも「無性化」，「知性化」していると思われがちであるから，この分析は他の地域よりもさらに重要さを増すと著者はいう。

中国の男らしさをどう原理化するか，この点に本書は多くの紙幅を割いている。少し詳しく紹介する。獣のような体，強い力，沈黙という西洋的「男らしさ」のパラダイムは中国には適用できない。なぜなら，中国にはこのような「男らしさ」の伝統はあるにはあるが権威的ではなかったし，「英雄」，「好漢」のような用語で表現される中国の伝統的「男らしさ」は，柔和・知的な伝統的男性像，つまり「文人」，「才子」と相殺されるからだ。このような「男」概念は西洋には見られない。さらに，西洋と違って中国の場合は，知的男性が武勇の男性を支配するという文化的構造がある。著者は，このようにして「男らしさ」に関する西洋モデルを否定する。

そして，中国を分析する際に多用される陰陽原理も斥ける。その理由は以下のように述べられている。陰陽原理は，男らしさと女らしさを二項対立的関係の中に配置し，真の男はたくさんの「陽気」（決定力，力，自己コントロール）を有すると想定するだけではなく，陰陽両気が無限のダイナミズムの中で，陰は陽として，陽は陰として現れるという，絶えざる相互作用が存在するとも想定している。これは，原理的には個々の男性と女性は陰と陽の両気を具有していることを暗示する。よって，性の区別を完全に陰陽原理によって解釈することにはそもそも無理がある。また，陰陽の無限の相互作用の潜在性と曖昧性はジェンダーの特異性の顕現化を妨げる。

したがって，男らしさの分析に最も有効なパラダイムは「文―武」の対概念のみであると著者は主張する。その理由を整理すると，大きく３つ挙げることができる。第１に，セクシュアリティの特性をより鮮明に打ち出せる点である。男と女は両方とも陰陽の用語で議論されるのに対して，「文―武」の二項対立は男性の分析であり，女性は女性性を捨て「自分が男である」と公的に表明する時のみ適用される。第２に，非漢民族の男たちもこのパラダイムから排除される。第３に，さらに重要なこととして，このパラダイムには階級性が含まれ，男性内部の階層性とジェンダーの差異を交叉させ，分析することができる点が挙げられる。「文」と「武」の意味合いは極めて複雑で多様であるが，基本的意味においては，「文」はメンタル，知的，文明を意味し，「武」は，身体的，力，武勇を意味する。理想的男性とは，この２つの属性を調和させた男である。

しかし，「文―武」は，調和的であると同時にダイナミックな対抗関係でもある。「文」はより上位の権力的エリート階級の理想であるのに対して，「武」は下位の，権力のより少ない下層階級の理想である。両者には，セクシュアリティの認識においても相違がある。女性との親密性を示す学者たちのロマンスと美の享受が「文」の共通テーマであるのに対して，「武」のヒーローは女性の魅力を拒否することによって，力と男らしさを誇示する。女性の獲得が，西洋において「真の男」の象徴であったのと対照的に，「武」の英雄たちは決まって自分のセクシュアルでロマンティックな欲望を抑制する。

続く第２章，第３章では，「文―武」の典型的原

型である関羽と孔子を論じる。第2章においては，「忠」，「義」のシンボルとされる千年不変の関羽像に，記号論と心理学，さらにセジウィックのホモソーシャル理論などの西洋的概念を導入し，中国の「英雄」関羽の情熱と欲望を取り戻し，性化させるという大胆かつ興味深い分析を行う［セジウィック1999；2001］。関羽と劉備夫人の関係，関羽・劉備・張飛三兄弟および劉備・曹操・関羽の三角形関係などの分析によって，関・劉の間には不平等な政治的権力と性的権力の関係が存在すること，そして「義」，「忠」のタームに隠れている権力と性のホモセクシャル的緊張関係を明らかにする。これはすべて関羽の劉備への背信を暗示する。

第3章では孔子に焦点を当てる。「武」の特徴に見られるホモソーシャリティ（homosociality）と女嫌いは，「文聖」の孔子にも見られると述べる。しかしここでの議論の焦点は，1949年以後の中国において伝統的「文―武」モデルが打撃を受けるなかで，知識人が「文」の復権をはかるために，いかに孔子を聖人，学者，教師，万民の救済者，そして商業的専門家として解釈してきたかに置かれている。

以上の第1章から第3章では，主に内的ダイナミズムによる「文―武」の変化を提示している。それに続く第4章から第9章では，外国文化がこの対概念にもたらした変化について検討している。

第4章では，古今の文学・ドラマにおいて「文」の男らしさがいかに体現されているかを見る。唐代の『鶯鶯伝』，元の『西廂記』，そして現代の張賢亮の3つの作品『緑化樹』，『男の半分は女である』，『習慣死亡』を分析対象とした。これらの文人・学者は孔子の教えを体現するが，セクシュアリティに関してはオーソドックスな儒教からは外れている。しかし多少の変化はあっても，「文」はモラルの体現者，セクシュアリティの独占者，強い自制力を持つものであるという「文―武」構造の基本的原理は保持され続ける。

第5章は『水滸伝』と賈平凹の『人極』を中心に，伝統中国の「好漢」モデルである武松と現代の「硬漢子」（tough man）を論じる。唐代から重要性を増した科挙は，「文」を成功の唯一の基準として定着させ，「武」を従属的地位に追いやった。「文」＝権力的，上層階級，「武」＝従属，労働者階級，女性＝無権力というヒエラルキー構図は，このように科挙制度の確立に伴って定着していった。百年にわたる近代化と50年の共産党統治にもかかわらず，中国の作家は伝統的ジェンダー秩序，「文―武」秩序と階級・権力の関係のパターンに従い続けていると著者は指摘する。

第6章では，女性作家がいかに「文―武」パラダイムに挑戦し，男らしさを規定しているかを，丁玲の『ソフィー女史の日記』，茹志娟の『百合花』とその娘である王安憶の『錦繡谷の恋』を通じて分析する。彼女らの表現による男らしさの特徴は，無邪気，性的にナイーブ，柔軟であり，「文―武」ではない。女性は男性をコントロールするために，男性的特徴を操る道を選ぶか，あるいは茹志娟のように男を死なせる。男を必要のないものとすれば，「文―武」も余計なものとなる。「文―武」パラダイムを否定することによって，中国女性は伝統的「文―武」の特質の残存物から自由になり，新しい世界を獲得する。

続く第7章，第8章では，「文―武」を国際的マトリックスにおいて考察する。第7章は，老舎が1920年代に書いた『二馬』を素材とし，新しい「文」モデルの再構築を試みる中国知識人が，外部勢力からどのような影響を受けたかを分析する。ロンドンで生活する馬姓の父，息子の外国人女性との恋，外国人男性と中国人男性，さらに中国人マイノリティ男性との複雑な関係の描写を通じて，人種・民族・ジェンダーと男らしさの複雑な関係を提示している。

第8章は香港とハリウッドで活躍する映画のスーパー・スター，ブルース・リー，ジャッキー・チェン，チョウ・ユンファのインパクトを検証する。「武」的男らしさの観念と表現が，ハリウッド的男らしさの構造とのダイナミックな相互作用の中で，自身も変化を遂げながら，同時に西洋の男らしさの観念も変えたと指摘する。

第9章は結論の部分にあたり，新しい時代に「文―武」がいかに解体していくかについて，著者の展

望が述べられている。かつて「文—武」の構造は特殊階層の利益を強化し，他者を排除する強力な道具となったが，世界化とジェンダー平等化の中で，「文—武」は決して固定的なものではなく，「作られる」ものであるということを明らかにすることによって，その「抑圧性」は取り除かれ，誰でもどの時点でも受け継がれる一種の生活スタイルになれば，人々を豊かにする道具になる可能性もあるのではないか。

Ⅲ

以上のように，本書では，「中国の男性は難解で，性的興味が全くない」という一般的イメージ，または「中国の男性は去勢されており，真の男がない」というよく見られる学問的結論は，西洋的男らしさモデルを基準にして導いた結論に過ぎなかったことを繰り返し主張する。また，男らしさを分析する場合に，文化というレンズを通して見なければならないという基本的スタンスが鮮明である。方法論的には，「文—武」を基本的分析枠組みとするが，著者が強調するように，中国のセクシュアリティに関する伝統原理と決まり文句の再現だけでは既存のジェンダーと階級原理を乗り越えることができないため，中国に即した方法論と同時に記号論，心理学，またホモセクシャルに関する理論なども持ち込んでいる。このようなスタンスと方法論が，中国の男らしさの特質を描き出すのに成功した要因のひとつだと考えられる。「男らしさ」に焦点を当てることを通じて，セクシュアリティ，階級，ジェンダーおよびそれらが政治・権力と複雑に絡みあった関係を読み解いた点で優れている。

印象的だった点は以下の２つである。ひとつは，「文—武」のパラダイムを持ち込むことによって，男性間にある厳然たるヒエラルキーを鮮明に描き出したことである。これは著者も認識しているように，中国的陰陽原理にも西洋のその他の分析枠組みにも不可能な点であった。今も続く「文」の支配的地位は，制度的・文化的に保証され，中国文化そのものの支えであり，また文化によって支えられている。「文化」という仮面に隠された抑圧構造の暴露は非常に重要だろう。もうひとつは，中国研究において従来あまり正面から扱われてこなかったセクシュアリティに焦点を当てることで，諸関係のカテゴリーとしての男らしさが立体的に見えてきた点である。「文」の優位を鮮明に浮かび上がらせたのも，やはり「文」のセクシュアリティに対する特権化によってこそのことだろう。

以上に述べたように，「文—武」パラダイムで男らしさを分析する方法は，本書の最大の特徴であり，最も成功した点のひとつである。しかし，一方で気になる点も多少ある。例えば，「文—武」は女性と外国人男性（非漢民族男性）を分析の枠組みから排除したため，女らしさやナショナリズム，エスニシティの分析は「文—武」の外側でしか分析できない。つまり男らしさの分析を通じて垣間見ることはできるが，同じ枠組みの中で同等には扱えないことになり，男らしさと女らしさのダイナミックな関係が見えにくいという構造になっているのではないだろうか。第６章から第８章における分析については，必ずしも「文—武」パラダイムを用いなくても良かったような気がしたのは，やはりこの枠組みの構造によるものではなかろうか。これらの３つの章では，男らしさがいかに女性や外国文化によって規定されているかが論じられ，「文—武」が決して自然ではなく，文化的構築物なのだという点が強調される。また「文—武」構造を外側から解体しなければならないという意図も感じられる。にもかかわらず，「文—武」の枠組みはうまく機能していない印象がある。今まで多くのフェミニストによって多用されている，「陰—陽」，「才—徳」の対概念に置き換えて分析してもおかしくはないのである。

また，第５章では「公」的領域における「文」の優位，「武」の従属，女性の無権力という序列の図式を提示し，男性の内側の階層性とジェンダーの非対称性を指摘しているが，しかし女性もまた属する階層や身分（例えば母として，妻として，娘として）によってさまざまな権力を行使でき，実際にも行使していたということが，最近の研究で明らかにされつつある。階級・身分に付随した権力と同時に，当

然その階層や身分に相応しい女らしさも要求される。本書の第5章には，ヒロインのレンレンは知識階層に属しているため，労働者階級のヒーローであるグァンツとは実りのない恋になってしまうことから，ジェンダーより階級のほうが支配的に働いているという重要な指摘があった。しかしここでは，レンレンが女性性を放棄し，「去勢された女」として語られている。これは女性が「文―武」の外側にいるため無権力であるはずであり，権力を獲得するなら女性性を放棄する方法しかないというテーゼにこだわりすぎた結果ではないかと思われる。実際には女性は去勢されなくても，いや，むしろ女らしいからこそそれなりの権力を行使できると考えられるのではないだろうか。またこのテーゼは，「公」的領域に活躍する女性が多くなる近代以後の分析にはカバーしきれないところもあると思われる。女性が完全に排除されたという原理的レベルに止まるのではなく，女性の権力の行使と女らしさ，女らしさと男らしさを一対で見ていくことの重要性，それらが複雑に絡んだ権力構造を解明していくことこそが，今後重要になっていくのではないかと思われる。

文献リスト

セジウィック，イヴ・コゾフスキー 1999.『クローゼットの認識論――セクシュアリティの20世紀――』（外岡尚美訳）青土社（Eve Kosofsky Sedgwick, *Epistemology of the Closet.* University of California Press. 1990）.

――― 2001.『男同士の絆――イギリス文学とホモソーシャルな欲望――』（上原早苗・亀澤美由紀訳）名古屋大学出版会（Eve Kosofsky Sedgwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire.* Columbia University Press. 1985）.

（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）